

二階 俊博総務会長 テレビ記者グループインタビューより

2007年9月27日(木) 15時20分～15時45分 於：本部リバティ3

(記者代表質問①)

政治とカネの問題について、自民・公明両党の政権合意では、「政治団体の一円以上のすべての支出に領収書などの添付を義務付ける」とした上で、公開のあり方について、今後、協議するとしている。調査を行う第三者機関の設置も検討されているが、どのような仕組みが望ましいとお考えか。

(二階総務会長)

三者機関の設置については私どもとしては、望ましいと言ってきたことだ。公明党と自民党との政権合意の協議の中でだいたいの意見が一致した。この件に関しては、福田総理も熱心だ。いかなる形になるのかは、今後、協議を深めていく。外国の例も参考にしながら、国民の目からみて、透明性があると納得してもらおう事になるのであれば大賛成だ。

(記者代表質問②)

一昨年の衆議院選挙で、郵政民営化に反対して離党した平沼赳夫議員の復党問題について、前執行部は復党を容認する方向で検討していたが、新しい執行部でも、方向は変わらないのか？

(二階総務会長)

党内ができるだけ円満に、あらゆる問題や政治課題にチャレンジしていくことが大事だから、いつまでも問題をひきずるよりも解決できるところは解決するのが良いと思っていた。ただ、解決を急ぎすぎること、別の面に亀裂を生じることがあれば、何をしたのか分からないという事になるから、もう少し時間をかける必要があると思う。伊吹幹事長も誓約書を頂きたいとの意向を示されているようだが、それはいろいろな面を睨んでそう答えたのだろうか、歩調を合わせて対応したいと思う。

(記者代表質問③)

解散・総選挙の時期について、福田総理大臣は、「国民生活や経済の状況なども勘案しながら判断する」としている。野党側は引き続き解散を求めると予想されるが、どのような状況下での解散・総選挙が望ましいとお考えか。

(二階総務会長)

野党の皆さんは、解散に追いこむという事を言い、この前の選挙で少し成績が良くなったからと言って勢いづいているようだが、まだ、選挙の準備は整っていないのではないか。だから、我われは相手の出方や状況を見ているだけではなく、総理が仰っているように、いかに国民の生活が向上しているか、国民の皆さんの期待にどう政治がどう答えているのかを考えていく事だ。そして、これは総理の専権事項だ。国民の皆さんに信を問おうという決断をすれば解散してということになっていく。今から年内がどうか予算の後だとか、無責任な時期が流れているが、これは総理が決断する事。今、急いで解散しないといけない理由はない。もう少し、皆さんの動向を見極めると同時に我われとしては政治に対する国民や支持者の皆さんの信頼を取り戻すために全力を挙げることが何よりも大事だ。

(記者質問)

福田内閣の発足で、概ね支持率が50%を超えているが、この事に対する受け止めは？

(二階総務会長)

福田新体制・新内閣の発足に対する、ハネムーンというかスタートの時期だから、大変皆さんが祝福をしてくれている面もあると思う。だが、同時に福田総理の持つ、キャラクターというか、国民の皆様に見える印象が、重厚にして誠実という、信頼に足る総理ということで、ここに支持が集まっていると思う。史上

第四位のスタートとなっていているのだから、これを受けてこの期待に添えて自由民主党が一体となり総理・総裁を支える体制を作ることが大事だ。

(記者質問)

昨日も大臣から政治資金の問題が出てきたが、そういう場合にはどういう対応をすべきだと考えるか？

(二階総務会長)

政治資金の問題については、今まで資金の報告書についても少し丁寧に慎重にして、訂正をできるだけ少なくすることが大事だ。だから、これだけ騒がせたわけだから、これからはだんだんと訂正をしなくても済むようにしていく。一般社会と同じような穏やかな対応ができるようになることがとても大切。

(記者質問)

予備選の導入など、公認候補者の選び方については？

(二階総務会長)

公認候補者の選び方については、自由民主党は伝統的に現職を優先してきた。これはある面で正しい。それまでの政治活動をみながらこの人こそ代表選手として出てもらうことが良いということになる。現職を優先するのは当然のこと。欠員が出たり、候補者が辞退をした場合には直ちに補えるように公募制があり、これが定着しかけている。選挙に勝つ方法は立派な候補者を立てることが極めて当然だが大事なこと。候補者は誰でも良いわけではない。選ぶ時が大仕事。選対委員長を中心にしっかりとした候補者を立てるといふことに協力したい。

(記者質問)

復党組への方針は？

(二階総務会長)

これから決めていくのだから一概には言えな

いが、ケースバイケースだ。一人は選挙区、一人を比例区でと言う方法もある。そこを選挙区、県連の事情とも聴取して適切に判断されると思う。

(記者質問)

国会の状況についてだが、安倍政権から福田政権に変わったが院内勢力は変わっていない。この状況下で、野党側の対応に変化は見られると思うか？

(二階総務会長)

大して変化はないと思うが、国民の皆様が与党・野党、政界の状況の一挙手一投足をじっと見ている。反対のための反対をずっと続けていて良いのかと言う問題意識は当然野党にもある。そこは、これから議論する事で自ずから道は開けてくると思う。

(記者質問)

テロ特措法について、各社の世論調査では継続に賛成の声が出てきているが、総務会長の受け止めは？

(二階総務会長)

国際社会に協力をしていくというのは国是だ。みんな民主主義の政治のあり方と言うのは、子供の時から学校で習っている。多数決で決めていく、そのために協議するというのは誰でもが理解している。国際社会が日本に何を期待しているのかと言えば、この給油活動を継続してもらいたいという事だ。日本にとって、国際社会に何を為すべきか。前に、湾岸戦争のときに、お金だけ出しておけば良いということで、泣け無しの金と同時に新たに税金を作りお金を持っていたが、大してありがたいとも言われないし、感謝決議のなかで日本の名前が欠落していたりと随分当時は残念だった。今回は、日本の活躍、貢献に対しての評価は大変なもの。日本の名前が入っていないが国連で感謝決議までされた。当然、その中には日本も含まれている。この給油活動を止める事が今後の国際社会における日

本の立場等がどうなるのかということも真剣に考えていかないといけない。それを踏まえて私どもは与野党で十分に協議をしていく。ここから先は協議を続けないと結果は分からない。分からないが、我々としてはベストをつくし、誠心誠意やっていきたい。

(記者質問)

総務会長の目から見て、新しい内閣は何を重点的に取り組んでいくべきか。

(二階総務会長)

先般の選挙で、年金の問題や農業の問題、大企業と中小企業の問題について指摘があったことを我われは承知している。私は、こうした問題について、政府与党、とりわけ自由民主党はこういうことができる、ということをお示ししてお示しして、しっかりと安心できる、頼りがいのある政権としての実績を積み上げる事が大事。しかし、それはいずれも目新しいことかと言えば、当然やっておく必要のあることだ。今後新たに広い意味で、日本がアジアにどう貢献していくのか、アジアの中で日本としてどういう立場を取っていくのか。また、科学技術の面で日本が持つ技術を存分に発揮し、その結果、そうした事の結果の果実をアジアの国々のみならず世界の皆さんに分け与えていく。そういうことについても日本は小さく縮こまって反省ばかりしているのではなく、やらなければならぬこと、また日本が期待されていることがたくさんあるのだから、それに応える新政策を打ち出していく意欲が自由民主党にも政権にもなくてはならない。先般、「ちきゅう」という世界一の海底7000メートルまで探査できる船が活動を開始した。来年の2月に戻ってくるが、その間、新しい発見が期待できる。日本近海には日本国民の一年間のエネルギー消費量の100年分を賄えるメタンハイドレードがあるという。専門家に尋ねたところ、200年分はあるということだった。そういうものが存在すれば、日本は今まで原料がない、エネルギーがないと教え込まれてきたが、そうじゃないということになる

と、これは新しい発展の門口に立つことになる。予算も付け、人もその方向に回す事も大事。農業の近代化でもまだまだやる事はある。今、外国に向いて行って日本の農業を広めているということもあるが、その面でも大いに活躍の場が広がっていくと思う。

(記者質問)

選挙対策委員長も含めて新四役ということだが、この体制はうまく機能するのか。どのようなイメージをお持ちか？

(二階総務会長)

みんな気心が知れている人だ。私は伊吹幹事長と当選同期だから。いろんな場面で話し合ってきた。昨日も谷垣政調会長とも話をして、今後、総務会と政調会との間でも十分な話し合いの場を設ける。定期的には、月に1回この会議を開き、あとは随時やっていく。この話は事務的に詰めさせている。政策と選挙もリンクしている。選挙は選挙だけ、政策は政策だけという分業ではなく、一体となってやっていくという新しい党の形を追求していく。